COLUMN

研究会たより

第21回 困った

萩谷昌己（東京大学／調査研究運営委員会委員長）

困った．原稿が書けないというわけではない．

今日は，総務財務運営委員会というところに呼ばれた．財政問題が議題である．よく知られているように（こんなに会誌が面白く，素敵なコラムもあるのに）情報処理学会の会員は減り続けている．毎年，700人くらいの入会はあるのだが，それを上回る退会があって，しかも，会費未納のための除名者も多い．特に，大手の情報関連企業の会員が減っている．それに対して，大学や研究所の会員は着実に増えている．委員会の場では，会員減少を如実に描く見事なグラフが提出された．このグラフは，やがて総会などで日の目を見ることになるのであろう．

財政難が議題になると，必ず出てくるのが，研究会への学会補助を減らそうという話である．現在，学会費の4%が研究会の補助となっている．この4%が多いか少ないかは大いに議論の余地がある．しかし，その具体的な値は別にして，この4%は非常に象徴的な意味を持っているのである．いわば，研究会と学会を繋ぐ唯一の糸といってもよい．

研究コミュニティというものは，どんなに小さいものであっても，独立心旺盛に独自の目標を持って突き進んでいくものである．そのような研究コミュニティが形成している研究会という組織が，学会の縛りを嫌うのは当然である．

とはいっても，学会がなくなってしまえば研究会もなくなってしまう．だから，研究会は学会全体に貢献しなければならないという考えもある．しかし，その逆も真であり，もはや研究会なくして学会もあり得ない．そのような学会と研究会を繋ぐ象徴が4%という学会補助である．この学会補助は，学会が研究会活動をその中心の1つとして据えていることを象徴しており，また，研究会はそれに応えて学会全体へ貢献することが期待されている．

そして，話はFITの問題になる．FITも，本来ならば，このような学会と研究会の信頼関係の上に成り立っているべきであった．しかし，研究会からのFITへの風当たりは今なお（というか，第2回を目前にしてますます）強い．その中心にあるのは，いうまでもなく，査読論文である．

私自身は，とても悲しいことに，査読論文を導入した張本人の1人になってしまった．何でこんなことになってしまったか，再び言い訳をさせていただくと，このFITの運営が信学会ISSと情報処理学会から独立したFIT推進委員会やその下の委員会で行われているためだと考えられる．もちろん，これらの委員会の委員はISSと情報処理学会から出ているのだが，ここで決まってしまったことは，相手学会との関係もあるので，容易には反対できないようになっているのである．しかも，プログラム委員長や実行委員長は，現在の学会の体制とは関係なく選ばれてきた．

すでに，このコラムでも査読論文の導入の経緯については述べた．第1回のFITの開催後に，研究会主査や論文の著者から，査読論文に関するアンケートを取り，その結果によって一応の改善を行い，現在，第2回のFITに向けた準備が進んでいる．そのプログラム委員会では，もう1回だけは，ISSと情報処理学会の全研究会に参加いただいて査読論文を行おうということに決まった．

しかし，査読論文やFIT全般に対する批判は多い．それぞれ，身に浸みるようによく理解できるものである．ということで，非常に困っている．第2回のFITの委員会では，FITの定着を目指した努力が行われている．それについては，何とかご支援をいただきたいと思う．ただし，そのような無理は長くは続かないだろう．

私自身の立場がどうなるかよく分からないのであるが，できれば，第3回のFITにはプログラム委員長にさせていただいて，研究会のFITへの参加不参加は自由とするなど，大胆な変革を行うべきだと勝手に考えている．現在，私に言えることはそのくらいである．（はぎゃ）

（平成15年2月13日受付）